

大阪弁ちやらんぽらん

田辺聖子

大阪弁ちやらんぽらん

田辺聖子

ちくま
ぶっくす

田辺聖子（たなべ せいこ）

1928年大阪に生まれる。樟蔭女子専門学校国文科卒業。

1956年『虹』で大阪市民文芸賞受賞。1963年『感傷旅行』で第50回芥川賞受賞。1958年『婦人生活』に『花狩』を連載。

〔主な著書〕『猫も杓子も』『窓を開けますか？』『中年の眼にも涙』『女の長風呂』（正統）『言うたらなんやけど』（正統）『おせいさんの落語』『文車日記』『準別王子の叛乱』『妾宅・本宅』『人間ざらい』など多数。

大阪弁ちゃらんぽらん

1978年6月20日 初版第1刷発行

Printed in Japan

著 者 田 辺 聖 子

発行者 岡 山 猛

発行所 株式会社 筑 摩 書 房

101-91 東京都千代田区神田小川町2-8

振替 東京6-4123 電話 東京(291)7651

0381-05007-4604 © SEIKO TANABE

厚德社・積信堂

大阪井ちゃんぽらん
目次

ああしんど 3

「あかん」と「わや」 13

あほとすかたん 23

えげつない 32

チヨネチヨネ 41

けったいな 51

こまんじゃこ 61

あんばい 70

ややこしい 80

しんきくさい 90

いちびる 99

ねちこい 108

あんだらめ 118

あもつき	128
あかめつる	138
ぼろくち	147
ウダウダ	157
タコツル	168
「サン」と「ハン」	178
てんか	187
あとがき	197

本文カット
灘本唯人

大阪弁
ちやらんぼらん



ああしんど、というのは、まずふつうに標準語でいえば、

おお くたびれた

という意味であろう。

しかし、しんど、又は、しんどい、という大阪弁にはほんとはもっと複雑なニュアンスがこめられており、使う場合によっていろいろの意味をひびかせる。

「くたびれた」一辺倒では、解釈しにくい。「しんど」は「辛勞」より来る、と牧村史陽氏の「大

阪方言事典」にある。辛勞が、しんろになり、しんどに変化していったのは、古く室町期ごろからで、それがしんどい、になったのは明和ごろ、一七〇〇年代からのようである。

だから、しんどい、というのは由緒ただしき古語である。長いこと使っているうちに、さまざまな場合に応用させていったのであろう。

「ああしんど」

と真夏、白昼の日盛りを避けて物かげで腰を下ろす日雇いのおっさん、沖仲士、彼らがつぶやくと、これは全く、疲労困憊くたびれた、疲れた、もうアカン、よう動かん、錢返すよつて、働くのん止めや、あほらして、もう、テコでも動けるかえ、などという、いわば「しんど」のオーソドックスな使いかたになるのだ。

重いものを担ぐ、それも一瞬の労苦でなく、その持続を強いられたときに発する嘆声である。ところが、これを、女がいうとまたちがう。前記の牧村史陽氏の本では、範例として、「中年増が畳の上へべたりと横坐りに膝を崩して」というと、「一種のびやかな、いかにも漫然とした色気がある疲れ方があらはれてゐる」といわれる。

たとえば、花見疲れ、芝居見物疲れ、という結構なつかれ。

まず帯をとく。

色とりどりの紐、帯あげ、帯じめ、おたいこの山、それらをとりすて、着物をぬぐ。花衣

が美しくとり散らかされた中に、長襦袢姿となつて、べったりと坐る。

「ああしんど……」

と年増（玄人さんでもよい）がほつとしていうわけである。るす番の婆さんに、

「何か、おあがりやすか」

と聞かれて、

「もうええ、おなかいっぱいや……」

などといい、ほんととは芝居のひいき役者を思い出して胸もいっぱい、うつとりしたりして、プログラムなんかで、胸もとをおおいだりしている、なまめかしい、ああしんど、である。

若い娘だと、お見合の席から帰ってくる、着なれない着物を着て、帯で締めつけたのでモノもたべられず、動きにくく、帰ってくるなり、着物や帯を脱いで、

「ああ、しんど！」

と叫ぶ。

こういう娘は、堪え性がない、と大阪弁でいうように、正月など、はじめてつくってもらつた大振袖を着る、仰々しい袋帯など、美容院から来て締め上げる、体にひと巻き、ふた巻きされたところで、それにつれてクルクルと廻ってしまい、やがて美容師が、渾身の力をこめて帯をしめると、

「しんど！ しんどいわ、もうあかん」

などと騒ぎ立てるのだ。

そうしてきれいに着付けてからも、帯のあいだに指を入れて、

「しんどいわ……」

と切なさそうにつぶやいているが、これらはおおむね、バストがゆたかすぎるからだ。着物を着るとき、洗濯板みたいな方が、きれいに着付けられるのである。

これがかもつと若い子の場合だと、ゴーゴーなど踊りくたびれて席へかえってくる、

「ああしんど」

と可愛らしい声でいって、腰をおろすが、曲がかわると、しんどいのも忘れ、跳ね上ってまたとび出しておどる。色けはない、無邪気な「しんど」であろう。

女子高校生がバレーやテニスのクラブでしごかれ、はや日が暮れて、足を引きずるようにして帰る、真ッ黒に日灼^{ひや}けして汗と泥によごれ、がっくりしてつぶやくのも、「ああしんど」であるが、これもまあ、女といふ条あんまり色けのない「ああしんど」である。

中年主婦がいう場合には、スーパ、デパート、市場をまわり歩いて、トイレットペーパー、洗剤を買い集め、両手に持ちきれぬほど持って、壁ぎわへ寄り、思わず荷をおろして、腰をのばし、

「ああしんど……」

などといったりする。

しかし、こういうときの語、こんなえらい目をして買出しするのは誰のためなのか、いまいましい、あのオッサンや、子供たちはこんな苦勞、知っとんのかいな、という、ふくれっつらのニュアンスがあるのである。

更には、こういう風に思わず自分がもらすためいき、又は、人に聞かせるつぶやきのほかに、口に出さず、腹でつぶやく「ああしんど」もあるであろう。

これは世の、おおむねの男、そうではないかと思える。生存競争、弱肉強食、小が大を併呑する会社なり仕事場なりから帰る、満員電車を乗り継いでやっと降り立った駅、バスに乗るにも行列、バスのストップから更に野こえ山こえしてたどりつく団地、そのまた一ばん端っこのひと棟の、さらに最上階の五階。

これでもか、これでもか、と苛められるようなわが家へたどりついて、腹の底からわき上がるためいきは、

「ああしんど……」

であるが、男として、そういう女々しいことはいえないのだ。男はだまってこらえているのだ。

しかしもし口に出すとすれば、まさに、「男が家に帰ったとき」であろう。更に、しんどい、には肉体的疲労だけでなく、精神的なそれも含まれる。

消耗する、というふうな意味がある。

「舅・姑、小姑が三人いるんですけど……でも、ご本人はいいかたでございますし……学歴も、

これこの通り。小姑はそのうち結婚して家を出られますしね」

などと縁談の仲人が説得しても、

「ああしんど、そんな家へはよういきませんわ」

と娘さんは一言でいう。

気苦労、氣ぶっせい、氣が重い、人生が持ちおもりする、そういうふうなとき、一ことで凝縮すると、

「しんどい」

に尽きるのだ。

新入りが古参・先輩の顔色を見、氣を使う、これまた、「しんどい」のだ。

この頃の若い者は、「ヨーイ・ドン！」の号砲一パツで、いっせいにスタートして走り出すが、何周めかであえなくダウンし、それも無念やるかたなき面持ちで落伍するのではない。あれよあれよと見るまに、しごく平氣なツラで、ふらふらと列をはなれ、あたまを掻いたりし、

「しんどうて、あんなアホなこと、やってられるかいな」

と席へもどってくる。

男の根性もへったくれもない奴が多いのだ。

「何でこんな、しんどい目エせんならんねんな」

などという、あつけられかんとした省察が、あまりにもしばしば若者をおそい、落第だといわれても一向おどろかぬ、それより、追試験などといわれると、昔なら最後のチャンスと悲愴にがんばったものを、今の生徒は、

「ああしんど」

などとぬかし、学校当局の親心を有難いとも思わぬのである。

そういう子供は可愛げがないが、まだ幼児のころに、たどたどしく、舌足らずに話をする、自分でももどかしげに、一生けんめい、わからせようと乏しいことばを、つなぎあわせて、ゆっくりしゃべる、それを聞いているおとな、じれったくもどかしいが、可愛らしくてたまらない、

「ハイハイ、それで?……そう?」

などと聞き、やっと幼児が話し終ると、

「ああしんど……」

と、聞いている方が疲れたりする。

幼児だけでなく、中風で口のまわらぬ人、どもり気味の人、ダラダラと牛のよだれのよう
に長々しく、持ってまわった言い方をして千万言を費やしながらい向に要領得ない人、そうい
う人の話のお相手をしているときも、

「ああ、しんど！」

というのである。

イライラしながら遮るに遮れない。(遮られるようなら、ことは簡単で、一向、しんどくないのだ。
遮れないから困るのだ。遮れる相手なら、ああうるさい、とか、さっぱり分らん、といつてすむ)しか
し、そうムゲにきついこともいえぬ、という相手、そんな、えげつないことようせん、という
人に対しては、じっと隠忍自重して耳かたむけるのだ。あきらめてじーっと聞いている、かる
いひそかな舌打ちを、こっそりするが、それをおしくさなければならぬ。

まさにそんなとき、相手が話し終り、話の要がのみこめたなら、

「ああ、しんど……」

とホッと重い息をつく。

それからして、「ああ、しんど」には、人生を見透すような思いもあるのである。

たとえば、定年間近の男、子供はまだ中学生ぐらい、あたまに霜をいただくまで、まだ働か

ねばならぬ、それを思うと、男は氣も遠くなり、「日暮れて道遠し」の人生の悲哀を感じずにはいられないであろう。

本人は、あきらめて、せつせと働き、いそしんでいるのだろうけど、こういう話は、聞いている方が思わず、

「ああしんど！」

と嘆声が出るのだ。そういえば、梅田雲浜先生なんかの家庭の事情をみるに、

「妻ハ病床ニ臥シ、児ハ餓エニ泣ク……」

しかも本人は肩まくりあげて、これから国事に奔走しようという、聞いただけで、

「ああしんど」

と出てくる。

かくの如き場合に使う。

わが友、熊八中年に、私は、

「どんなときに、しんど……といえますか？」

と聞いたら、彼はしばし小首かしげ、

「さよう、僕らですと、まず、ポルノ写真なんか見たときでしょうか」

「へえ！ どうしてポルノが……」